

## 渡辺省亭

世に隠れた孤高の神絵師

文・野地耕一郎

超一流なのに目立つことを好まず、ただただ創作三昧にふけったせいで、今では世に忘れられてしまった画家がいる。つまり自ら二列目に甘んじながらも堂々と真ん中を占める、今回はそんな画家の一人、渡辺

省亭(一八五一〜一九一八)をご紹介します。

省亭は、ひと昔前まで専門家でも「しょうてい」と読んでいた。美術事典などにも「しょうてい」と記載されているくらいだから、いかに今

まで世に知られずにいたかというところだろう。しかし、これは「せいてい」が正しい。

まずは、図1の《牡丹に蝶の図》からご覧頂きたい。日本画の技法で言うと、いわゆる没骨法もつこぼうといって輪



図1 牡丹に蝶の図 明治26(1893)年 絹本着色・軸 143.6×69.4cm 個人蔵

郭線を引かずに色の濃淡で写実的に対象となる事物を描き出す方法は、江戸時代の円山応挙まろやまおうきよ以来の「円山四条派」得意の表現として知られていたから、これを描いた省亭も円山四条派系の画家とずっと思われてきたのだが、よくよく見ると西洋画の遠近法や光による立体表現が溶け込んだ実にモダンな作品だということが分かるだろう。それもそのはず。省亭は、明治一一(一八七八)年にパリに渡り、印象派サークルとも交流をもった最初の日本画家なのだ。この絵は、パリから帰国後、一二年くらいして描いたものだが、丹念な写実表現というだけでなく美というものが移ろいやすいものであるという「写意」までもが描き込まれている。現代の花鳥画家だって、これだけの腕前の人間はいないかもしれない。それと、横山大観よこやまのひろらが朦朧体もうろうたいの実験で光を日本画で表現した明治三〇年代半ばより、この絵はさらに一〇年ほど先んずるといっても驚くばかり

なのだ。

## 早過ぎた「近代的な」画家として

その省亭は嘉永四年、蔵前の札差の子として江戸は神田南佐久間町に生まれている。本名は義復よしまた、のち良助。家業を継ぐべきところ、仕事にいつまでも身が入らない息子を親もあきらめ、好きな絵の道につかせて菊池容斎きくちようさいに入門させたのが慶応三(一八六七)年、省亭十六歳のときだ。

絵の師匠となった菊池容斎(一七八八〜一八七八)は、当時もう既に八〇歳の老人だったが、狩野派かののを基礎として円山四条派や浮世絵風、やまと絵から果ては洋風画まで学んで、それらを折衷し、「容斎風」といわれた覇気のある独自の作風を打ち立てた近代画家の先駆けのような絵師(画家)だった。新奇好きで科学的な指向をもっていた容斎が、省亭たち門弟に施した絵の修練もまた一風変わったものだった。例えば、容斎に随行した省亭が町で見かけた人物の着物や柄や髪の様子がどうだったか、後で師匠から諮問を受け、すらすら答えられないと大目玉をくらったという。しかし次からは見たものを眼に焼き付けるようになり、これが写生の力を養うのに役立つと回想している。



図2 花菖蒲に鯉魚図 明治20年代前半頃 絹本着色・軸 116.0×40.0cm 個人蔵

さて、そんな容斎のもとで絵修行を積んだ省亭は、師風を模倣墨守すべからずという師匠の教えに従い、容斎が得意とした歴史人物画のみに向かわず、主に花鳥画に新機軸しんきよくを拓いていくことになる。時は明治。その契機となったのが、海外輸出用の陶器などを扱っていた日本最初の貿易商社「起立工商会社」での工芸図案の仕事であった。明治八(一八七五)年頃から同社の製品デザインを手掛けたことで、西洋人に受けそうな絵付けのモチーフとして色鮮やかな日本の花や鳥を描く必要にせまられ、と同時に洋風の写実表現による洒落なセンスをも省亭は研ひかぐことになったからである。

その甲斐あって、明治一〇年の第一回内国勸業博覧会で起立工商会社のために製作した金髻図案が花紋賞

牌(三等賞)を受賞。そして、翌明治一一(一八七八)年のパリ万博でもやはり同社から出品の工芸図案が銅牌を受賞したのである。これを機に、彼は起立工商会社の嘱託社員としてパリに派遣されることになるのだが日本画家としては、これが最初の渡欧とされる。省亭、二七歳のことである。

帰国したのは明治一三年のことと思われるから、約二年ほどの滞仏中に省亭は、美術収集家ビュルティヤ印象派のパトロンであったジュール・ジュ・シャルパンティエの家の夜会で、席画のデモンストレーションを行い、その時に省亭が水彩で描いた鳥の絵を臨席していた画家ドガにあげたという記録が、エドモン・ド・ゴンクールドモントの『日記』に記されている。さらに面白いことに、同じくゴ

ンクールによる著作『ある芸術家の家』によれば、ジュゼッペ・ペ・ニツティスというマネの弟子だったイタリア人画家が、省亭の描法を研究するために省亭が万博に出品していた『群鳩浴水盤ノ図』という本画を購入したというのだ。この絵は、最近の調査で米国ワシントンのフリーア・ギャラリーに収蔵されていることが分かった。フリーア・ギャラリーの所蔵品は門外不出の原則があるのだが、図録でご覧頂きたいのだが、明治一一年の時点で省亭の日本画における写実力がいかに高く洗練されていたものかが分かると思う。

帰国後の省亭は、明治一四年の第二回勸業博覧会に『過雨秋叢図』かあゆあきそうずを出品して妙技三等を受賞。その後明治一七(一八八四)年からフェノロサフェノロサが主宰した「鑑画会」にも省亭



は参加しており、明治一九年の第二回鑑画会大会に出品した《月夜の杉》は二等褒状を受けている。この鑑画会に関わると見られる省亭作品で、現在米国ボストン美術館所蔵の《芦邊遊鴨》などには、合理的な光線表現と陰影感をもなった動勢ある筆致がうかがえる。図2《花菖蒲に鯉魚図》もそれに近い作品だろう。

その指向するところは、旧来のどの画流派の表現にも偏らない「和洋の総合」ともいえる実にはハイブリッドで洒脱な作風の表現といえるだろう。省亭における「和洋」とは、師匠の容斎風の「和」のなかに旧来の

画流派に加えてすでに「洋風画」が含まれるわけだが、さらに積極的に渡欧までして実際の「洋」を接取したところに、とりわけ特長があったのである。そしてその後、明治二〇年代には絵画における時間や情感の表現としての「写意」を手に入れるところまで到達していた。前代までの統一された世界の中に組み込まれていた事物を、型から開放して再構築することこそ新時代の画家のつとめとすれば、「外的写実」から「写意」へと進んだその後の「日本画家」たちにとって、省亭はきわめて「近代的な」画家だったはずだ。

### 写実をこえる技を自在に

こうした和と洋を融合した極めてハイブリッドな表現を実現していた省亭の作風は、冒頭で記したように近世以来洋風を撰取してきた「円山四条派」の先端的表現と当時から見られていたから、フェノロサや岡倉天心らが、明治二二(一八八九)年に開校する東京美術学校の「円山四条派」系教授として省亭を招こうとしていたのも頷けるといえる。省亭はこれを断ったという。その訳は、制作する自由な時間が無くなるから。

ただ、海外の博覧会には、明治二二年のバリ万博に出品して銀賞、明治二六年のシカゴ・コロンプス万博には《雪中群鶏図》(東京国立博物館蔵)を出品、明治三七(一九〇四)年のセントルイス万博にも《花鳥》を出品して金賞を受賞するなど積極的に参加しており、それがまた海外での省亭人気を呼ぶ結果となった。そんな時代に、淡々と作画にふけていた省亭が描いていたのが図3《時鳥図》のような絵だ。画面右下の款記から明治二九年の制作とわかる作品だが、写実的なモチーフの扱いや勢いのある描線、画面にひろがる余韻は一抹の寂寥感となつて時

鳥が飛ぶ夜空から感じた情感を浸み渡らせている。いわば、自然の再現としての写実をこえようとする領域への踏み込みを感じさせる技は、すでに自在のものだったにちがいない。

### 二列目ど真ん中に生きた日本画家

省亭の画業は、これまで述べてきた様に日本の伝統的な各画流派別に区分けされていた従来の呼称から、すべからず「日本画」へと総称されていった明治という時代を横断している。明治一〇年代以降に次第に普及し認知されることになる「日本画」の領域に組み込まれたそれまでの絵

師は日本画家となり、前代までの各画流派の中で統一されて組み込まれていた事物を、型から開放して再構築することが急速に求められていった。明治という新時代において、それこそが新時代の日本画家のつとめであったわけだが、「外的写実」を導入することからやがて明治三〇年代に「写意」へと進んだその後の日本画家たちにとって、「日本画」成立前夜に彼らに先行して実際に西洋に渡り直接西洋絵画から極めて写実的な表現を獲得し独自の叙情的な作風まで練り上げた省亭はきわめて「近代的な」画家として映ったと思われる。

ただ、省亭はその後、急速に近代

化してゆく世に背をむけるように、明治四〇(一九〇七)年にはじまる文展にも出品することなく、晩年まで市井の一家として淡々と粋な情感こもる花鳥世界を描きつづけ、大正七(一九一八)年春、浅草区西三筋町で没した。享年六八。亡骸は、浅草今戸橋のたもと曹洞宗潮江院に葬られた。戒名は「法華院省亭良性修善居士」。命日の四月二日は、子息の俳人渡辺水巴によって省亭得意の花鳥画にかけて「花鳥忌」と称されている。

のちに近代の美人画家として名を馳せた鏑木清方は、生涯市井の画家として生きた省亭に対して終生あこがれをもって尊敬したという。図

4の《雪中之鴨図》は、その清方が生前こよなく愛し大切にしていた作品だ。ここに掲出した作品を含む省亭の貴重な花鳥画が、この春、京橋の加島美術ギャラリーに一堂に集まるといふ。二列目ど真ん中に生きた省亭の生き様とその作品を、私も行く春と共に堪能したいと思つている。



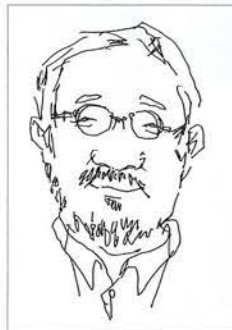
図4 雪中之鴨図 明治30年代頃 絹本着色・軸 149.0×70.0cm 個人蔵

### 展覧会情報

## SEITEI 「蘇る! 孤高の神絵師 渡辺省亭」展

2017年3月18日(土)~4月9日(日) (会期中展示替えあり)  
加島美術  
東京都中央区京橋3-3-2 電話:03-3276-0700  
開館時間:10時~18時 会期中無休

※東京国立博物館、迎賓館赤坂離宮、山種美術館、松岡美術館、根津美術館にて、各館が所蔵する渡邊省亭作品が展示されます。



のじ・こういちろう  
泉屋博古館[東京]分館長  
(イラスト:石原 葉)